

# 盆栽の図像学

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

第二十六回  
三代 歌川豊国 《春宵 梅ノ宴》

解説／田口文哉

三代 歌川豊国 《春宵 梅ノ宴》（しゅんしょううめのうたげ）  
大判錦絵三枚続 各紙とも35・9×25cm 弘化4〜嘉永5年（1847〜1852）  
版元／林屋庄五郎 個人蔵

浮世絵師紹介  
三代 歌川豊国（さんだいうたがわとよくに） 天明6〜元治元年（1786〜1864）  
数多い浮世絵師のなかでも最大級の作例を残した江戸時代末期の絵師。はじめ歌川国貞と名乗っていたが、その後当時の人気絵師の一人であった師匠歌川豊国の名を継いだ（本人は二代目と名乗っていたが、実際は三代目であった）。庶民が鉢植を楽しむようになる時代に活躍した浮世絵師であり、多くの鉢植が彼の浮世絵版画に描きあらわされている。当時の鉢植・盆栽文化を知る上で、最も参考になる絵師と言える。



## 春夜

春宵一刻値千金  
花有清香月有陰  
歌管樓台多細細  
鞦韆院落夜沈沈

「春夜」と題されたこの七言絶句（一句七文字の四行詩）の漢詩は、中国・北宋時代（十〜十三世紀）の地方官僚でもあった詩人、蘇軾（そしよく、蘇東坡／そとうぼ）と号した。1036年〜1101年）が詠じた。

この漢詩を読み下し、現代語訳すると次のようになる。  
春宵（しゅんしょう） 一刻（いっこく） 値（あた）い 千金（せんきん）  
花に清香（せいこう）あり 月に陰（かげ）あり  
歌管（かかん・歌や管弦の音） 楼台（ろうだい・高い建物） 声（こゑ） 細々（さいさい）  
鞦韆（しゅうせん・ぶらんこのこと） 院落（いんらく・中庭のこと） 夜（よる） 沈沈（ちんちん）

春の夜のひとときは、千金にもあたいます。花は清らかな香りを放ち、月はおぼろに霞（かす）んでいる。さきほどまで歌声や管弦であれほど賑やかだった高樓は、声もすっかり静まり返り、女たちがあそんでいた中庭のぶらんこも、いまは静かに垂れ下がって、夜は深々とふけていく。

漢詩の原文では、詩の意味や世界観はつかみづらいが、読み下しと現代語訳をふまえて、ことばを空想のなかで遊ばせると、春の夜の宴の後にやってくる、蘇軾が感じた静かな感興が伝わってくるものである。

本詩の、春の夜の風情は千金にも値するという意味の初句は、時代と国を超えて、日本でも能や歌舞伎などさまざまな分野の文芸や芸能に引用されている。新たな年を迎えた本号では、まさに初春の風情にふさわしい、この詩の初句を冠した作品を紹介する。

## 梅の宴の晴れ舞台

まずはこの絵をじっくり見ていこう。画面左側の中景から遠景にかけては広大な池が広がり、対岸には屋敷や太鼓橋が見えている。特定することはできないのだが、おそらく大名庭園と思われる場である。この池のほとりのみごとな花を咲かせた白梅の根元に、白や赤の椿が顔をのぞかせ、その右側の竹垣の手前には水仙が花を咲かせている。いずれも初春を代表する花々である。

次に手前の女性たちが集まる仮設の座敷にはろうそくが立てられており、遠景の夜空や画面左端の灯籠の三日月形の窓からこぼれるともし火からも、この場面が春の夜、つまり題名にある「春宵」をあらわしていると思われる。そしてこの梅の木元に、さら

びやかな着物に身を包んだ女性だけが集まって宴を開こうとしているのである。まさに「春宵 梅の宴」である。

咲き誇る花の色気にも劣らない女性たちの豪華な着物は、右の女性から、鮮やかな青色の留袖で、その裾の裏地にはヤジロベエの紋様が施されていたり、その左で座敷に腰掛け、楊枝をくわえる肩刺し、お歯黒のおかみさんの場合は、「蜀江（しよくこう）」と呼ばれる八角形と四角形を組み合わせた中国由来の紋様である。次に中央で座敷の上に立つ振袖のお嬢さんは、「松皮菱」紋の粋な色づかいの着物を着込み、帯は鳳凰紋、手に持つ畳紙には銀鎖をかけるというおしゃれな装いで、その手にはしっかりと猪口を携えているのである。

座敷の上には料理が盛られた鉢と、「杯洗（はいせん）」と呼ばれる杯を洗う器に水が張られ、猪口が一つ浮かんでいる。他にも一人腰掛けしている留袖のおかみさんが振り返る視線の先には、二人の女性がやってきたところである。挨拶する振袖のお嬢さんの着物は、紫地に杜若が散らされ、福良雀が舞い飛ぶ紋様。後ろの留袖のおかみさんは、松笠と思われる紋様である。いずれも劣らぬ晴れ着であるが、この場面に集まった女性たちの視線をたどると、中央と左に在る振袖のお嬢さんを中心に、どちらの着物がすばらしいか、見た目を競うかのような女性の好奇心も感じられる絵作りの面白さである。

## 宴を引き立て、女性を彩る

女性だけの宴の場。この晴れの舞台を彩るように、棚の上に七点の鉢物が飾られている。上段右から、瑠璃釉波濤文の長方形鉢にざわめくようなみなぎりな枝ぶりの白梅。続いて氷裂文の鉢に万両が赤い実をつけており、その奥には七宝繋ぎ、特注の中心に花をあしらった「花七宝」と呼ばれる文様の鉢に、枝垂れの白梅が満開の花を咲かせている。次に下段に下りると、向こうから竹文様の鉢に松、隣は宝尽くしの長方形鉢に松葉蘭。そして手前にはまず縞文の染付鉢が見え、続いて卍崩しの文様の袋式の鉢には、これも初春の花の代名詞である福寿草が花を咲かせているのである。

庭木の花々とこれら鉢植の花や木、そして女性の着物が、夜空をバックともし火を受けて浮かび上がり、女性たちの宴の場を一層鮮やかに装い、主人公たる女性たちを引き立てる舞台装置としての役割を果たしている。この場面が絵空事であるうとなかろうと、「春宵 梅の宴」の場と人を引き立てる絵画表現ならではの華やかさが、この図の最大の見せ場であろう。「絶景かな、絶景かな、春の眺めは値千金とは、小せえ、小せえ。この五右衛門には値万両、はや陽も西に傾き、まことに春の夕暮れに、花の盛りも又ひとしお、はてうらかな眺めじゃなあ」「春宵一刻」の句が引用された歌舞伎「櫻門五三桐（さんもんごさんのきり）」で、主人公の石川五右衛門は京都南禅寺の山門の上でこう見栄をきる。稀代の大盗賊も、梅の宴に集まる女性たちも、そしてそれを見る私たちも、花に魅了され、花に彩られて、いつの時代の人々も共有してきた春の夜のえもいわれぬ風情を堪能しているのである。（続く）

著者プロフィール  
田口文哉（たぐち・ふみや）  
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。  
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究所博士後期課程修了 芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知  
■「大宮盆栽村90周年記念盆栽展 早春の賦〜漢詩で楽しむ大宮盆栽村の美」  
概要：大宮盆栽村の各盆栽園から出品される秘蔵の名品盆栽を題として、埼玉県漢詩連盟に所属する漢詩人たちが、「オーダーメイド」で漢詩を詠じます。盆栽の自然美をうたう漢詩とのコラボレーションによって、イメージ豊かな自然景の世界をご堪能ください。  
会期：平成25年2月1日(金)〜2月13日(休) 毎週木曜休館  
主催：さいたま市大宮盆栽美術館・大宮盆栽協同組合  
協力：埼玉県漢詩連盟・手漉き和紙たにの  
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091